5

以上述ぶるが如く、本書は少壯森林家に對しては、その座右として、纏れ絡んだ森林の小徑に對する確實なる案内者となり、又同時に複雑なる森林取扱に對する、完全なる海圖ともなり、更に自己の知識の更新を希へる老練なる實地家に對しては、その好伴侶として、確にその智的欲求を補足する一助となることを信じて、茲に同學の士の御一讀を奨むる所以である。(完)

林業語彙 (三)

Aoki, S. Tyujō, M.: Terminology of Forestry.

青木 繁
中條 道夫

(コ)の部

戸

(コ)

吾が大和民族は、血族團體にして民族制度により固められたり。即ち其血縁の連鎖に依りて、團體は大氏に大別せられ、大氏は幾他の小氏に岐れ、小氏は數多の戸より成れるなり。而して、戸は一家に同棲せる全員即ち兄弟、姉妹及其子孫を包含する處の家族共產體なるなり。

「註」戸(コ)を(ヘ)と訓ずる場合に就きては、別項、戸(ヘ)を参照すべし。

鑛山用備林 (コウザンヨウソナヘバヤシ) (カー二五五)

秋田藩に於て良材繁茂せる森林を、鑛山用に供する爲地元人民の入山を禁止したるものなり。

小 氏 (コウヂ)

吾が古代社會の氏族制度に於ける一階級にして大氏の下に位し、當時の庶民階級なりし種々の部(ヘ)を附屬せり。(前出、氏並に大氏の項参照)

功 田 (コウデン) (オー一四四)

古代勳功ある者に賞與せし田地を公田と言ふ。大寶令に、凡功田大功世々不絶、上功傳三世、中功傳二世、下功傳一世、とあり、父子を一世と云はば、曾孫に至りて三世なり、他は之に準ず。

又、大功非謀叛以上、以外非三八虐之除名、並不收、とあり、乃ち大功は謀叛以上の犯人の外、上功、中功、下功は子孫本犯除名にて流移せらるゝも、父母の功田は並に收められずとなり。(田命講義)

郷 林 (ゴウバヤシ) (ウー四四)

郷林は又郷山とも稱し、藩有山と區別せる公有林にして、一村又は數個村共有の性質を有す。

郷林と性質同様なるも、呼稱を異にするものに、

熊本藩に於ける所立山、和歌山藩の共有山林、金澤藩の百姓持山御林、秋田藩に於ける郷山、鹿兒島藩の村受山、福岡藩の家業山、松江、母里、濱田、徳島藩等に於ける野山、麻生藩に於ける新林等のものあり。

郷 山 (ゴウヤマ) (ウー三一)

一般に藩有山と區別したる公有林を郷山と稱す。

又秋田藩に在りしものは村有林にして、個人所有の山林なる符人山との區別は元來判然し居らざりしも、寶曆年代に至り、山帳(林帳)に登録せらるゝに至れり。

「附記」郷山の山帳(林帳)に登録せらるゝと同時に、植栽せる地上物件は、地所の官民有の如何を論ぜず總べて植立帳に記入せられたり。

(秋田藩林制史)

御要害山 (ゴエウガイヤマ) (カー二五三)

幕府直轄たる神奈川領に於ける官林の一種にして、特に軍備上必要なる森林なり。

國營田 (コクエイデン) (オー一四八)

國營田は、國司に於て經營する官田を云ふ。即ち官田所在地の國司廳の所管にして之を經營するものなるが、其の耕作費及種子代は營種料として給與せられ、農夫を役役して之を細らしめ、其穫稻は政府に納進せしむる省營田と同様なるものなり。(大日本農政類編)

國司 (コクシ) (オー一四七)

國司は即ち國の守にして、大化の新設に於ける地方長官の謂なり。而して國司は、一人にて一國を司るあり、或は數國を司る者あり、其任務は農政振作を第一とし、毎年一度管内を巡察し、風俗を觀、囚徒を録し、農功を勸め、郡司の能不能を察し、百姓の疾苦を問へり。(日本農政史)

國司公廨田 (コクシクゲデン又はコクシクガイデン)

國司の經費に充當する爲に設置せられたる田地を、國司公廨田と稱したり。

五貫文山 (ゴクワンモンヤマ) (カー二六七)

名古屋藩にあり、木曾遺臣の所有に係る山林なり。古山又は三貫文山とも呼稱す。

試仕立山 (コ、ロミシタテヤマ) (カー二六〇)

秋田藩にありて、或る林分の仕立見繼山(官地民木林)となすべきや、或は抱山(民林)となすべきやの検査未済のものを稱す。明治維新の際には、之を試植林と稱せり。

小作 (コサク) (オー一五二)

近世の小作とは、中世の頃の百姓の意味を含み、他人の土地を借耕するの義にして、別に又、預作、下作、入作、掟作、請作、卸作、水入作、掛ヶ放ち、

雜錄

佃等とも言はれたり。

「註」小作と云ふは自分所持の田畑を、居村たりとも他の百姓へ預け作を爲し又は田畑質に取り、元地主にても別人にても作を爲し、小作年貢の外に餘米、入上米杯と言ひて、一反に何程と作徳を究め作らするを云ふ。元來、佃とか言ふものなれども、世俗、小作と唱へ來る。(地方凡例錄)

小作人 (コサクニン) (オー一五二)

他人の土地を借りて耕する百姓を一般に小作人と云ふ。別に又、水呑、個人、作人、作主、作手、作子、頭振(カシラフリ)、門百姓、抱百姓、入百姓、被官、名子(ナゴ)、間人(マフトフ)、府人(フニン)、無縁者等とも呼ばれたり。

蔭引 (コサビキ) (オー一五二)

耕地に蔭をなす樹木ありて、作物に害をなすものは、一村内にて耕地際一間通りを伐拂ひたる故に、蔭引に及ばざりしと雖往還並木の類にして、止むなく殘すものに對しては蔭引とて、檢地の際丈量面より差引くを法とせり。

腰林 (コシバヤシ) (シー一九九)

松江藩に於ける一人持の民林に對する呼稱なり。

「附記」此の林に對しては藩に同じく民林なる野山(ノヤマ)に於けるが如く干渉する事なく、伐木、栽培等總べて人民の自由に任す。又賣買譲與の如きも、村吏の公認を受け處分をなす慣例なり。

五土 (ゴド) (オー一五八)

五土とは、地種の合稱にして、山林、川澤、丘陵、墳衍、原濕を云ふ。丘は土地高き處、陵は大阜、墳は水邊の岸、衍は卑くして平なる處、原は高平にして打開けたる處、濕は卑くして、しめりある處を云ふ。此の五種の土地は食物の外種々なる萬物を生じて、國家永遠の利となる。之を用ひて盡る事なし。

五部一山 (ゴブイチヤマ) (カー二六六)

(農鑑)

飯肥藩に於ける二官八民の部分林なり。

「附記」當藩には此の他、二部一山、三部一山等あり。

五歩指山 (ゴブサシヤマ)

人吉藩に於て、部分林(官地に人民の植林を許可し、其收益を一定の歩合の下に分収するもの)に對し用ひたる呼稱にして、其の利益分収歩合は、五官五民なりき。

五分仕立山 (ゴブシタテヤマ) (カー二六四)

熊本藩にあり、野山の中、地味に應じ、人民自費植栽をなし、成木に至り、官民折半をなすものなり。

「附記」之と同様なるものに、高知藩の植分林、棚倉藩の植分山等あり。

御本山 (ゴホンザン) (シー四八ウー二六八)

津輕藩に於て用ひたる官營林に對する呼稱にして、一名御手山(オテヤマ)とも稱す。純然たる官山にして、某保護監守は、之を山麓村民に委ね、時々山方役人を派して、荒廢の跡を検せしむ。而して山麓村民に對し、その報酬として副産物及び矮小薪炭材等、官山の保護上支障なきもの、自由伐採を許可したるものあり。即ち明山、留山の別を設けたるなり。

明山とは、人民の入山を許可したる官山の名稱、留山とは人民の入山を禁じたる山の名稱なり。(明山の項参照)

「附記」徳島地方に於ては御本山と同様なるを、手林と稱す。(手林の項参照)

米 簀 (コメハズ) (オー一六三)

米簀は、又米札とも云ひ、白紙を截りて製作したる米を本位とせる兌換券の如きものにして、佐賀藩に於て廣く使用せられたり。

而して、米簀には一升札、二升札、五升札、一斗札、二斗札等の種類あり。

米 札 (コメフダ) (オー一六三)

(米簀(コメハズ)の項参照)

小物成 (コモノナリ) (オー一六三)

小物成とは、本物成に對する税目にして、本税に對する附加税と見るべきものなり。

小物成には、山役、野錢、川役、獵役等種々あり、各藩に依り、其の状態を異にするも、納方は普通金納なるが多し。

小山守 (コヤマモリ) (オー四四五)

水戸藩に於ける山林監督者なる山横目(又は大山守とも稱す)の下役なり。

御用山 (ゴヨウヤマ) (ウー二五)

各藩概れ官營林に對し此名稱を有す。蓋し、官林に對する總稱なるべし。此の他同意義の名稱なる御山、御林等あり。(各項参照)

墾田 (コンデン) (オー一六六)

開墾したる田地を墾田と云ふ。古代新田開發の法に「新に山野を開墾すること」及び「荒廢地を再び開墾する」の二法あり、之れ後世に於ける「新田開き及び荒地開墾」なり。

墾田の種類には、新墾(ニヒハリ)小墾田(ヲハリタ)、治田(ハリタ)等の別あり。又墾田には公私の二種あり、公墾田は官命を奉じて百姓之を開墾して公田となし、私墾田は百姓に空閑地又は荒廢地を賜ひ、自ら之を開墾せしめて私用となすものなり。

仁徳天皇十四年、大溝を掘り、石河の水を引き、四萬頃の田を得たり。

孝徳天皇大化二年八月、堤、溝、墾田を奨め給ひたる他、歴代開墾を獎勵せられたり。

開墾田は後、多く庄園となりたり。

(サの部)

材木奉行 (ザイモクブギヤウ) (カー二七二)

林政の總管をなす機關の稱にして、多くは勘定奉行に隸屬したるものなり。

山奉行、林奉行と稱するも之と同様に於て、其の下には、保護、培養及利用の事を管する山役人、山横目、山目付、山方吟味役等と稱する監査役數名を置きたり。

在 渡 山 (ザイワタシヤマ) (ウー四七)

之は又村渡山とも稱し、村落の自由處置に委し、且、藩廳に於て其所有を認可せる山林なり。

雜木立運上山 (ザフキタテウンジャウヤマ) (ウー三五)

幕領に於て用ひられたる承役官林に對する呼稱にして、地元人民の薪炭材の供給、山稼等の生業保護の爲、官林を使用収益する慣行ありたるものなり。

「附記」雜木立運上山と同様なものを、飛驒地方にありては百姓御救山、島原、神代藩等に於ては免場官林、最上藩に於ては平山林と稱す。(各項參照)
又、大村藩に於ける木炭山、薪山、飛驒地方の雜木立山、その他渡世山の如き、皆之と同様なり。

雜木立山 (ザフキタテヤマ) (カー二五六)

飛驒地方に於て用ひられたる、一種の承役官林に對する呼稱にして、地元人民に、薪炭材等を相當代價を以て下げ渡したるものなり。之は又百姓御救山とも稱す。

「附記」雜木立山と同様なものに、鹿兒島藩の稼山、大村藩の薪山、木炭山、最上藩の平山林、島原、神代藩の免場官林、幕領の雜木立運上山、その他渡世山等あり。

作 人 (サクニン) (ウー一五)

國司の配下にありし自由民、又は領家領主の家人奴婢の解放せられて、自由民となりたる者が自由意志によりて、農業に従事せる者を云ふ。

差 上 林 (サシアゲバヤシ) (シー一九〇)

官地若くは民地に人民有志者が自由植栽をなし、三ヶ年又は五ヶ年手入をなし、之を官に獻納せるものにして、最上藩に於て用ひたる呼稱なり。猶差上ぐ

るものへは名字、帶刀等の賞賜あり、且、元民地にして伐採跡返地を請ふ者へは、之を下戻す。

「附記」秋田藩、南部藩に於ては差上林と同様なものを、忠臣植立林、米澤藩に於ては、御注進林と稱す。又、村松藩に於ては寄林と云ふ。(各項參照)

定 役 (サダメヤク) (オー三二)

(浮役(ウキヤク)の項參照)

里 御 山 (サトオヤマ) (シー一六九)

熊本藩にあり、地元町村或は人民に杉、扁柏等の植栽を命じ、その保護手入をなさしめ、御山根帳に登録し、其立木は藩用又は其地方の堤塘、橋梁、其他風火災家屋等の建築に供し、枝條下草類は無代にて名受者に下附す。

「附記」同じく里御山と稱するも、その性質の全然異なるものあり。即ち別項奥山と稱するを參照すべし。

里 山 (サトヤマ) (カー二九)

(奥山の項參照)

差 分 ケ 杉 (サワケスギ) (シー二〇五)

佐賀及小城藩に於て、無立木の官地へ民力を以て種々の樹木を植挿し、成木の上、六官四民又は五官五民の割合にて部分したるものなり。

三ヶ一賣分山 (サンガイイチウリワケヤマ) (マー二七三)

森林より得たる收益の中、三分の一を民が收め、三分の二を上に乗る制度ある山を云ひ、仙臺藩に行はれたり。

三ヶ二賣山 (サンガニウリヤマ) (マー二七二)

森林收益の三分の二を民がとり、三分の一を上に乗る制度の山を云ひ、仙臺藩に行はれしものにして、飢肥藩、延岡藩にては、之を三部一山と云ひたり。

三貫文山 (サングワンモンヤマ) (カー二六七)

(古山の項參照)

山草、隱草 (サンサウ・シフサウ) (オー一八九)

山草とは、山野の乾地に好みて生育する諸作物を云ふ。即ち穀類に在りては、麥、蕎麥、甘藷、大豆、小豆及び甘藷、草綿等の類なり。

隠草とは、濕地を好み、乾地を嫌ふ諸作物を云ふ。穀類にては、稻、稗、黍、稷、及び蜀黍、慈苳仁(タウムギ)、慈姑、牛房、款冬(ヤマブキ)、芹の類、花卉にては花菖蒲、溪蔬(アヤメ)、木賊、蘆、蓼、藍の類なり。此の隠草は、物に依りては水に作りても、畑に作りても生育す。又水草と云ふは、極めて陰草にして、水を離れては生育し難き諸草なり。即ち蘭、蔬、蓮、河骨、芡實(ミツブキ)、蓴菜(ジュンサイ)、澤瀉(オモダカ)、蒲の類なりとす。(農家須知)

三草四木 (サンサウシボク) (オー一八五)

地方的通語にして、普通には、麻、藍、紅花(べにばな)、或は麻、木綿(モメン)、藍、或は又蘭、紅花、多葉粉(タバコ)を三草と云ひ、四木とは桑、楮、漆、茶の四種を云ふ。何れも民家にとりて、重要な植物なれば、總括して斯く呼ばれるなり。

三世二身法 (サンゼイツシンハフ) (オー一八六)

開墾獎勵のために設けられたる有限土地私有制度にして、元正天皇の養老七年に天下に發布されたるものなり。即ち新に溝池を開墾したるものには多少を論ぜず、土地を興へ、三世に傳へしめ、又古き溝池に依りて開墾する者には、終身土地の私有を認めたる制度なり。

三部一山 (サンブイチヤマ) (シー二〇九)

低肥藩に於ける一官二民の部分林なり。

「附記」當藩には三部一山の他に、二部一山、五部一山等あり。

三分杉 (サンブスギ) (ウー三九)

秋田藩に於て、部分林なる取分林に對し用ひたる別稱にして、人民の請願に依り、官地に植林を許可し、一定歩合即ち三官七民の割合を以て、其收益の分収をなせるものなり。(取分林の項参照)

「附記」南部藩に於ては、三分林を歩合取分林と稱す。而して其の收益分収の

割合は、秋田藩と多少異なる。

散林 (チリバヤシ) (ウー三一)

高知藩にて用ひられし森林の名にして、民有地にして開墾し難き所に、天然に生立せる林を官林として取上げたものなり。

山林書上帳 (サンリンカキアゲチャウ) (ウー二七)

各藩に於て、其の藩内に於ける森林に關する一切の關係事項を記入し、所持したる帳面なり。

山林本締役 (サンリンモトジメヤク) (カー二七三)

山奉行の下にありて、森林の保護及び利用及び造林の監督實施をなせし役の名なり。

鞘山 (サヤヤマ) (シー九二)

享保十一年、尾張藩の吏、市川甚左衛門、代官兼材木奉行となり、上松なる材木監廳を福島に移し、頗る山林業に盡し、諸制度を革し、留山の數を増加し、而して、木曾にありて、明山立入の境界を判明ならしむるため、明山、留山及び巢山の中、幅三間乃至四、五間の伐木を禁じたる處を鞘山と云へり。

(徳川氏木曾山)

「註」明山、留山、巢山に關しては各項参照。

竿打 (サヲウチ) (オー一八六)

竿を以て、土地を検する事を云ひ、小面積の地に行はれたり。

「附記」竿打は日に同じ場所を幾度も行はれたるものゝ如し、大面積の地は竿によらず、繩を用ひたりき。

竿取 (サヲトリ) (オー一八二)

測量者のことにして、檢見坪刈を行ふに當り、一坪の面積を計るに竿を持ちてせり。その人を云ふ。竿は通直なる竹にして、長さ六尺一分のもの四本を正

方形として、四隅を切違ひて組立て、取外しを自由なる様にせり。

「附記」竿取は其の加減によりて、收穫に大影響を來すを以て役人立會の上に

にて之を行ひたりき。

竿 延 (サヲノベ) (オー一八三)

間竿の寸法が改まりたる事によりて、以前の尺にて面積を云ひし時よりも稱へ方によりて、増したることを云ふ。

「附記」六尺五寸を以て間竿として測量せし時と、六尺を間尺として測量せる時とにては、後者の面積は前者によりて得たる面積の數よりも大なるが如し。

定建鹿倉山 (ヂヤウタテカグラヤマ) (カー三〇)

(鹿倉山の頂参照)

定 納 山 (ヂヤウナフヤマ) (シー九二)

木曾にあり藩有林の中、人民に貸與し、樹木を植立てしめ、相當納税せしめ、たるものを云ふ。

「附記」之と同様なるを、熊本藩に於ては、御百姓植立山と稱す。

山地新林 (サンチシンバヤシ) (シー一四七)

高知藩にあり、人民秣場山に養用せざる所あれば新に栽培し、藩林となせるものなり。

定 米 山 (ヂヤウマイヤマ) (ウー三四)

紀州藩に於て用ひられたる承役官林に對する呼稱にして、官に於て使用料を徵集し、雜木、柴草等を艾伐せしめたるものを云ふ。

「附記」定米山と同様なるを、秋田藩に於ては運上山又は狩人運上山と稱す。

(各項参照)

(シ) の 部

鹿 倉 山 (シカクラヤマ) (カー一五六)

之は又定建鹿倉とも稱し鹿兒島及び高知藩に在りし一種の官營林にして、天然の大森山を、藩廳特定の御用商人(之を御手山支配人と云ふ)に命じ、其私

費を以て樺木、柞灰、樟腦、椎茸、木灰等を製造せしめ、製品は或は藩廳に買

上げ、他に發賣し、或は製品に若干の課税をなして之を自由に發賣せしめたり。地元人民には、年々若干の税金を納付せしめ、鑑札を下附し、自家用薪炭材を採收せしめたり。又二、三年目毎に、御札銀と稱し、若干の納金をなさしめ、又は差杉をなさしむ。(低肥藩の狩差山は之と全く同様なり。)

「註」延岡藩の鹿倉山、一名手形山と其性質異なる。

寺社家抱境内山 (ジシャイヘガ、ハ) (カー二六七)

(分附山の項参照)

士族抱地山 (シゾクカ、ヘヂヤマ) (カー二六七)

(拜領地の項参照)

下 草 役 (シタクサエキ) (オー一九四)

官林の下草を採集する者に對しては、下草錢なるものを課するとの規定を云ふ。(下草錢参照)

下 草 錢 (シタクサゼニ) (オー一九四)

藩有林に對し、年々些少の小物成を納めて、其山の生草を採集する場合には、此の雜税を下草錢と云へり。下草とは、官木の下に生ずる雜草の意なり。

(地方凡例錄)

仕立見繼山 (シタテミツギヤマ) (シー五一)

弘前藩に於て、部分林に對し用ひたる呼稱にして、見繼山の如く藩廳より命令したるものに非ずして、人民の請願に基きたるものなり。即ち人民より官山の伐跡地若くは空地に、自費植栽せん事を願ひ、藩廳の許可を得たる官地民木なり。(見繼山の項参照)

「附記」仕立見繼山と同様なるものに、秋田藩の取分林、神奈川、南部藩の歩合取分林、鹿兒島、佐土原、高鍋藩の一部一山、會津、二本松、中村、桑名藩の部分山、棚倉、高知藩に於ける植分林等あり。

仕立山 (シタテヤマ) (ウー二九)

(御仕立林の項参照)

賜田 (シデン) (オー一九八)

恩賜の田地を云ふ。古代田地は生活の源資なりき、故に之を賜はる事は、當時第一の名譽としたりと云ふ。

寺田 (ジデン) (オー一九八)

平安朝時代に於ける寺院の所有地を云ふ。寺院の所有地は無税地であるが故に、之を利用して私腹を肥せしものあり。寺田の制は、後年班制度を破壊し、土地併合の害を流す源となれり。

支配山 (シハイアツケヤマ) (カー二六一)

高知藩にあり、同藩の支配山主が更に他人をして、之を預らしむるものなり。(支配山の項参照)

支配山 (シハイヤマ) (カー二六〇)

高知藩にあり、元野山と唱へ、人民肥草刈取場の内林に、適當の箇所を見立て人民より預り度き旨出願する者あれば、自費にて樹木を植栽せしめ、自由に伐採する事を許可す。而して、其の樹木の中、大木は山方へ申出て伐木す。

其の他、新田林、領地林等の名義あるも、其の性質何れも支配山と同様なり。

柴札 (シバフダ) (カー二五五)

(後田札山の項参照)

隱草 (シフサウ) (オー一八九)

(山草、隱草の項参照)

仕法山 (シハフヤマ) (カー二五七)

大村藩にあり、人民一般家作、舟板等に供する分、見積代價を以て拂下ぐるものなり。

「附記」同藩に立替山と稱するものあり。

潮霧園山 (シホキリカコキヤマ) (カー二五八)

高知藩に於ける保護林の一種なる海岸風潮除林なり。

莊園 (シヤウエン) (オー二〇三)

皇族、貴族又は有力者が、田舎に有したる農地を云ふ。又田莊、莊地、莊所等の名あり。

莊園記録所 (シヤウエンキロクショ) (オー二〇四)

莊園の由來を正し、莊園を明記する役所にして、之を設けたるは、後三條天皇が藤原氏の專横を抑へ、民政を改革せんとして行ひ給へるものなり。

莊官 (シヤウクワン) (ウー一九)

王臣權門の子孫にして、地方にありて莊園主よりの委頼により、之を管理せるものなり、されど、事實は實權を有し利を收め居しものなり。

莊家 (シヤウケ) (オー二〇二)

平安時代に莊園を管理し、之より上る租稻を貯へ置く爲に、園主の作れる事務所を云ふ。莊家は普通民家を當てたる故に、莊家の人々は、園主の權力を恃みて、勢を得たりと云ふ。

「附記」莊屋とは莊家の後身なりと云ふ。

莊司 (シヤウジ) (ウー一九)

莊官に同じ。

赦免建山 (シヤメンタテヤマ) (カー二六七)

(拜領地の項参照)

衆力山 (シユウリキヤマ) (ウー三〇)

(御物山の項参照)

樹果 (ジユクワ) (オー二〇九)

樹果とは樹上に生育する果物を云ふ。柿、梨、桃、栗、梅、椎、柑橙の類なり。之を久しく貯ふる方法は、稻糠の中或は淨砂の内に埋め置く可とす。栗及び椎は外殻ありて其儲貯ふるも、克く久しきに堪ふべしと雖、砂中に貯ふるを最

も可とす。橙柑の類は、十分熟せざるとき、損傷なきものを選び、一斗許入るべき樽を能く淨洗し、砂に焼酎五合許を吹き掛け、丁寧に攪き交ぜ、樽底に厚さ二、三寸に敷き、その上に次第に重ね上げて暖所に置くべし。(農家備要)

省 營 田 (シヨウエイデン) (オー二〇八)

平安朝の頃宮内省の管營によりし田を云ふ。主上の御料並宮室の御料米は、特に此の田よりの物を用ひ給へり。

職 寫 田 (シヨクシヤデン) (オー二一九)

大化の新政に由りて定められたる田制の一つにして、農民に授けたる農民が逃走し、又は戸籍を削られ等したるものは、政府にて口分籍を除去し、政府にて經營管理せり、之を職寫田と云ふ。

職 田 (シヨクデン) (ウー一五)

(職分田 (シヨクブンデン) の項參照)

職 分 田 (シヨクブンデン) (オー二一九)

昔在官せるもの、職分に應じて與へたる田を云ふ。
「附記」大寶の令中に曰く次の下し。

大政大臣 四十町

左右大臣 三十町

大納言 二十町

剩 田 (シヨウデン) (オー二一八)

大化の改新により、田制を改め、位田、職田、口分田等とし、餘れるものを剩田と云ひき、此の田は人民に貸付けて、地子田となせり。

所 當 (シヨウタウ) (オー二一五)

鎌倉時代に於ける莊園にて、下地よりの年貢を取り立てる權利なり。當時の領家は、表向きには下地の所有者たりき。故に事實は土民の所有地たりとも、是より年貢を取るの權利を有せしものなり。

雜 錄

證 文 山 (シヨウモンヤマ) (カー二六七)

(抱山の項參照)

諸 衛 射 田 (シヨエイシヤデン) (オー二一六)

奈良朝の頃、諸衛府の人々に射術を獎勵のために設けた田にして、別名騎田とも云ふ。

白 木 塚 (シラキカセギ) (オー二二〇)

白木塚とは飛驒山中にて、檜、樺、ひば、黒部の諸材を以て、葺板、楠木、天井板等を製作する營業を云ふ。是は一ヶ年切りの請願にて、白木地方兼帶役と云へる官吏ありて、調査の上許可し、山廻役人に達し、證書を徴取し、其の伐採工事の場所を定むるを例とす。但し、その用材は、公用に供し難き筋曲り木、或は根木、末木、根返り、立枯等とす。

運上金は、一ヶ年總額金二百八十一兩なりき。(飛州地方御尋答書)

代 (シロ) (オー二二二)

古代に於ける土地の面積を算するに、代と云ふ語を以てしたり。代即ち「シロ」は物を培養する處即ち苗代の如き處を云ふものなれば、大體に於て一定の土地の場所の義と解すべし。一代は、今日の約七歩に相當したるが如し。

(日本農政史)

新 御 立 山 (シンオタテヤマ) (カー二五九)

萩藩にあり、人民より獻納せしもの、又は山野等より精選し、新に官林に編入せしものなり。

神 戸 (ジンコ又ハカンベ) (オー八九)

神田を耕作する農民を稱し、神社の經營に供する爲に、土地を獻納すれば、其の土地内の民戸も之に従ひて神地の民となり、所謂神戸となるものなり。古代土地の所有主移動すれば、民戸も又必ず之に附隨し行くを例とせり。神封戸に其の意通ず。

五七

侵墾地 (シンコンチ) (オー二二五)

官に届けず、無断にて開墾したる地の謂なり。即ち官簿に記載せられざるも官山、官林用附屬地等の證ある土地を、私に開墾し耕作するを侵墾地と云ふ。人民の無届開墾地と云ふに等し。(大日本農史)

新立山 (シンタテヤマ) (カー二六七)

木曾にあり、人民が自費植栽をなし、之を所有せし民林なり。

新地改 (シンチアラタメ) (オー二二三)

開發したる新地を檢分する職名なり。徳川時代、山野を開墾し、又河海湖沼地を埋立干拓して新開地となし、之を檢地せしめたり。現今開墾の後、稅務署員が實地に臨檢すると同様にして、相當重き職務なり。而して、之は早く仁孝天皇の御宇に存したること、大日本租稅志に見らる。

新田林 (シンデンバヤシ) (カー二六一)

(支配山の項参照)

新林 (シンバヤシ) (カー二六六)

(郷林の項参照)

下地 ()

藩主、豪族等が自己の支配の實際に行き渡る地を稱せしものなり。

(ヌの部)

巢高山 (スタカヤマ) (ウー二二六)

加賀藩、或は幕府直轄神奈川領に於て用ひられたる呼稱にして、鷹の巢の蕃殖を計るため、監守人を置きて保護したる官山なり。又巢鷹山とも書す。

「附記」尾張藩に於ては、巢高山と同様なるを、巢山と稱す。

巢山 (スヤマ) (ウー二二六)

鷹の巢の蕃殖を計る爲、監守を置きて保護したる官山の稱にして、尾張藩或は人吉藩に於て用ひたる呼稱なり。而して狩獵は勿論一切入山するを得ざる禁

伐林なり。

「附記」加賀藩或は幕府直轄神奈川領に於ては、巢山と同様なるを、巢高山と稱す。又巢鷹山とも書す。

水源林 (スエゲンリン) (カー二五八)

秋田藩にあり、水源涵養を目的とする保護林なり。

出舉 (スエキコ) (オー二二八)

平安朝時代に行はれたる貸借制度にして、公出舉と私出舉とあり。公出舉とは政府と個人との貸借關係を云ひ、私出舉とは私人間の關係を云ふ。されば政府は、之に對し監督をなし期間及び利息等を決定したり。

(セの部)

關所林 (セキシヨバヤシ) (カー二五三)

(館山の項参照)

(ソの部)

惣百姓入山 (ソウヒヤクシヤウイリヤマ) (ウー二二六)

百姓が、自由に入山し得る民有の山林にして、岡山藩にありたるものなり。

惣村百姓山 (ソウムラヒヤクシヤウヤマ) (ウー四六)

之は、又一村總持と稱し、村落所有の山林なり。

柚山 (ソマヤマ) (マー六三九)

樹木を植付け、木材を採取する爲の山にして、其の所有は部落等に屬せしもの如し。

「附記」柚山の例を冲繩に見るに、舊藩時代にありては、自家用たると稼業用たるとの別なく、自由に無代にて樹木を伐採し、藩が用水として指定せしものにて、之を徵收するときは、相當なる支拂をなせりと云ふ。